

金澤醫學會雜誌第二卷第九號

論說 及 實驗

◎猩紅熱Scarlatinaノ實驗

名譽會員

黒柳精一郎述

此實驗ヲ述ソニハ先ツ猩紅熱ノ來歴及此傳染病ノ現今
坤輿上ニ播布スルノ度ヲ大畧探知セサルヘカラス依ッ
テ史乘ニ徴シ聊其大要ヲ舉クヘシ

「チームセン」氏謂ヘリ凡ソ觸接傳染病中痘瘡ホト畏ル
ヘキモノアラスト雖モ今ヤ痘瘡ハ種痘術ニ賴ツテ之レ
ヲ防クヲ得レハ現今觸接傳染病ノ首位ヲ占ムルモノ蓋
シ猩紅熱ナラント此言以テ該病ノ實況ヲ伺フニ足レリ
斯クノ如ク現今歐洲ニテハ猩紅熱ヲ以テ重要ノ傳染病
トナセ其來歴ヲ尋ヌレハ僅ニ千七百年代ノ初ニ於テ

「セーデンヘム」氏及ヒ「センチルト」氏等カ本病ヲ殊別
ノ疾患ト倣シ之ヲ記載セシヲ以テ嚆矢トナス是レ蓋シ
此ヨリ以前猩紅熱ナキニ非サルモ麻疹等ト同一視シタ
ルニ依ルヘシ夫ノ「モルトン」氏カ一千七百年代ノ終ニ
於テ尙ホ本病ヲ麻疹ト混同シタルノミナラス降ツテ千
九百年代ニ到ルモ尙ホ之レト同一ノ謬見ヲ懷クモノア
ルヲ見レハ以テ證スヘキナリ爾來本病ノ英國及歐洲大
陸ニ流行シタル例證甚タ多ク現ニ英國ニ在ツテハ千八
百四十八年ヨリ千八百五十五年ニ到ルノ間毎年ノ本病
死亡數ハ全死亡數ノ二十分ノ一ニ達セリト云フ病勢ノ
猖獗ナル推シテ知ルヘキナリ、歐土ヨリ病毒延テ諸方
ニ播布シ北米ニハ千七百三十五年既ニ本病ノ流行アリ
「イスランド」ニハ千八百二十七年、「グリュンランド」ニ

ハ千八百四十七年、南米ニハ八百二十九年、濠州ニハ千八百四十八年ニ初メテ本病ヲ發シ亞細亞及阿非利加ノ如キモ漸次本病ノ侵入スル所トナレリト云フ

如斯本病ハ既ニ汎ク坤輿上ニ流布セリト雖モ痘瘡麻疹等ニ比スレハ其範圍尙ホ甚タ狭クシテ亞細亞及阿非利加等ニ在ツテハ未タ此病ヲ發セサルノ地蓋シ僅少ナラサルヘシ

翻ツテ我日本ヲ顧レハ往古ノコトハ固ヨリ遯乎之ヲ考フルニ由ナシ近世ニアツテモ亦タ確實ナル猩紅熱ノ大流行アリシヲ聞カサルカ如シ「ウエルニヒ」氏カ多年本邦ニアツテ醫學ノ教授ヲ司トリ其所著ノ世界周遊記ニ日本人ハ猩紅熱ニ不感性ナリト記シタリシモ亦謂ナキニ非サル可シ然レモ猩紅熱ニ類セル疾病ハ時々各地ニ散發シ殊ニ本病ニ特異ノ合併症タル腎臟炎ヲモ併發スルヲ是レ吾人カ往々耳目ニスル所ナリ之ヲ以テ見レハ

日本ニハ從來猩紅熱ナキニ非サレトモ其發スルヤ散在性ニシテ流行性トナルヲナキヲ以テ其報道モ亦乏シキカ然レモ其汎ク流行セサル所以ハ將タ本邦風土ノ然ラシムル所ナルカ將タ亦眞ノ猩紅熱ニ非ラスセテ之ニ類セル一種ノ熱性病タルニ由ルカ聊カ疑ヒナキ能ハス殊ニ此金澤地方ニアツテハ該病ノ實況從來尙ホ詳カナラス是レ余カ此實驗ヲ報道スル所以ニシテ聊カ此道ノ爲メニ裨益スルヲアラハ幸甚ナリ而シテ余カ此實驗ヲナシタルハ金澤病院ノ救療患者ニシテ今詳カニ之ヲ報道スルニ至リシハ該患者室擔任岸氏ノ力ヲ不訥矣

實驗記事

井上某三十五歳ノ農婦ニシテ石川縣河北郡瀧端村ノ産ナリ

既往症 禀賦強壯ニシテ記スヘキ大患ニ罹リシヲナク幼時既ニ天然痘及ヒ麻疹ヲ經過セリ十七歳ニ初メテ月

花ヲ見二十歳ニ結婚十九歳及ヒ二十三歳ニ各一男子ヲ
 擧ケ嘗テ梅毒ニ感セシヲナシ本年二月初ヨリ利尿ノ際
 疼痛出血アリ且ツ利尿頻數ニシテ夜間就蓐後利尿ノ數
 二十四ニ至リシヲアリ依テ同月五日金澤病院婦人科ヘ
 來リ膀胱腫及子宮頸管加答兒ノ診斷ヲ受ケ入院治療中
 三月十一日頃ヨリ時々惡寒ヲ覺ヘ食氣減損シ十二日初
 メテ前胸部背部及ヒ上腿ニ赤色ノ發疹ヲ現ハシ熱發ス
 十三日十四日ニ至リ發疹漸次ニ増加シ体温三十九度餘
 ニ達シ食氣殆ト缺乏シ煩渴頭痛アリ十六日ニ至リ發疹
 顔面及上肢下肢ニ發現シ体温四十度五分ニ達セリト云
 フ

(現在症)同十八日午後之ヲ診セシニ体格張壯筋肉豐實
 稍々脂肪ニ富ミ体温四十度五分脈搏百五至床上ニ安臥
 シ身體倦怠甚タシク起臥自由ナラス顔面ヨリ軀幹及ヒ
 上下肢ニ至ル迄手掌足蹠ヲ殘サス普ク充血鮮紅色ニシ

テ(恰モ辨慶ノ畫像ニ對スルノ感アリ)無數ノ發疹簇生
 シ各疹ノ面積ハ小豆大ヨリ大豆若クハ葡萄實大ニシテ
 皮膚面ヨリ著シク隆起シ其面平坦稍蓐麻疹ニ類セル所
 アリ大ナルモノニ在リテハ其中央少シク陷凹シ且ツ其
 色濃紅ナリ又指壓スルニ周圍ハ全ク褪色スルモ中央ハ
 然ラサル所アリ又タ大ナル發疹ハ中央ノ表皮微ニ破開
 シテ少許ノ滲出物ヲ漏ラシ其汁衣衾ヲ沾シ患者ニ近ク
 トキハ臭氣殆ント堪ヘ難シ然レトモ著シキ水泡若クハ
 膿胞ヲ呈スルニ到ラス

眼瞼ハ甚シク腫起シ開眼スルコト克ハス且ツ結膜炎アリ
 テ膿汁ヲ漏出ス口腔粘膜ハ赤色腫張シ口唇ニハ著明
 ノ發疹アリ舌ハ赤色ニシテ腫張シ其面粗糙トナリ濕潤
 ス而シテ患者ノ尤モ訴フル所ハ咽頭ノ疼痛ニシテ飲料
 ノ嚥下ニモ高度ノ困難アリ依テ咽頭ヲ檢セントスルモ
 開口スルコト克ハス輕度ノ精神昏朦及ヒ頭痛アレトモ

甚シカラス 譫語ハ絶ヘテナシ只々輕度ノ重聽アルノミ
食慾全ク欠亡便通異常ナリ脾臟ノ腫張ヲ認メス

經過 十九日 全身ノ皮膚中等ニ鮮紅色ヲ呈シ就テ詳
カニ之ヲ檢スレハ前記ノ發疹簇々密生シ爲メニ相癒合
シテ其面積天保錢大ヨリ小兒手掌大ニ至ルノ平坦ナル
隆起面ヲ呈ス殊ニ背部上膊等ニ於テ然リトス又顔面及
ヒ手足ニハ著シク充血浮腫ヲ呈セリ又發疹ハ頭ノ被髮
部外聽道ニ瀾蔓シ耳内ヨリ多量ノ膿汁ヲ漏出ス此日午
後体温四十度三分脈搏百至

二十日 前日ニ異ナラス尿ヲ檢スルモ濁濁赤色ニシ
テ反應ハ酸性比異ハ一〇二五ナリ此日午後体温三十九
度五分脈搏百至

二十一日 皮膚及發疹ノ色稍褐色ヲ帶ヒ充血ノ減少セ
ルヲ覺フ食機モ亦少シク振フ此日午後体温脈搏前日ニ
同シ

二十二日 皮膚ノ色稍消退シ胸背ノ部ヨリ少シク落屑
ヲ始シム此日体温三十九度二分脈搏九十至

二十三日 皮膚ノ褪色及落屑増々著シク四肢顔面ノ浮
腫ハ増加セリ

二十四日 此日檢尿蛋白ナシ諸症前日ニ異ナラス

二十五日 全身ノ皮膚偏チク落屑ヲ呈ス

二十六日 前日ニ異ナラス

二十七日 陰部ニ疼痛ヲ覺フ内診上外陰部ノ糜爛及膺
加多兒ヲ認ム

但シ二十三日ヨリ二十七日迄ハ体温日ニ下降シテ殆
ント三十八度内外ニ至レリ

二十八日、二十九日、三十日 特別ノ異狀ナシ只体温ハ
其間昇騰シテ殆ント四十一度ニ至リシヲアリ檢尿否
(白ヲ見ス)

四月一日 体温下降シテ殆ント平温ニ至ル顔面及四肢

ノ浮腫去リ食機増々振フ

二日、三日、四日、五日 諸症前日ニ異ナラス落屑ハ尙

依然トシテ手足ノ如キハ殆ソト手袋及足袋ニ類セル大

ナル表皮ノ剝脱ヲ見ル

六日 軀幹所々ニ癰疽ヲ生ス其數凡ツ七八個

七日 落屑全ク止ム

八日 諸症全ク平癒シ体力殆ント舊ニ復ス

前陳ノ諸症狀ニ依リテ考フレハ成書中書記ノ猩紅熱ト

多少ノ差異ナキニ非レハ發疹ノ形狀落屑ノ狀態及一般

ノ經過猩紅熱ヲ措キテ他ニ之レヲ命名スヘキ疾病アル

ヲ知ラス只爰ニ一ノ疑フヘキハ該患者ノ發病ハ金澤病

院入院後殆ント四十日ヲ經タルノ後ニシテ本病ニ感染

スヘキ機會アルヲ認メス且ツ發病後兩三日間他ノ患者

ト同室セシモ更ニ他ヘ傳染セシノ形跡ナキニ在矣聊カ

疑ヲ遣シ以テ大方ノ諸彥ニ質ス

(完)

◎眼ノ鉛直線ニ於ケル震盪症ニ就テ

(第一總集會演說)

(Ueber den Fall eines Nystagmus in verticaler Richtung.)

名譽會員

高安 右人

夫レ眼ノ震盪症ハ古來先哲ノ充分ナル經驗アルヲ以テ
今更之ヲ報告スルノ價直ナシト雖モ余カ經驗シタル所
ノ者ハ震盪症中甚タ稀ナル者ナレハ敢テ之ヲ報スルモ
亦決シテ無益ニ非サル乎万一讀者諸君ノ參考ニモナラ
ハ幸甚々々

余之ヲ報スルニ先キ震盪症ノ一般ヲ陳述シ以テ讀者ノ
便ニ供セント欲ス

往古既ニ眼球一定ノ方向ニ於テ振子狀ニ絶ヘス運動ス
ル者ヲ震盪症 Nystagmus ト名ケタリ其運動ハ患者ノ意
識ニ因テ之ヲ左右スル能ハサルモ眼ノ隨意運動ニハ更
ニ障害ヲ及ホスコナク却テ振盪ヲ一定ノ方向ニ於テ誘

(論說及實驗)

猩紅熱ノ實驗○眼ノ鉛直線ニ於ケル震盪症ニ就テ

二百五十九